価値の社会学的考察（Ⅱ）

―― 行為と価値

丸山哲央*

A Sociological Study of Value (Ⅱ)

―― Action and Value.

Maruyama, T.

(4)

ブーグレ，C.は，「価値」を個人的，一時的な，単なる感賞的印象と区別して，そこに時間的展望，社会的展望を持込むことによって，「価値」に理性的，反省的ないしは意識的な限定を与えた.[1]本論文の後段においてみるように，クラックホーン，C.も「価値」を欲求，衝動，カセクシスといったものから明確に区別している．「価値」は個人的な恣意，欲求，願望等と一線を画することによって，それだけ客観化の方向へと前進する．しかし「価値」が如何に客観性を持ち得るといっても，それを自然の法則の中に解消せしめてしまうことは出来ないであろう．一方，「価値」を，自然界とは区別される思惟（意識・精神）の世界を設定して，その中に位置づけるとしたら，「価値」は経験科学の領域から姿を消してしまう．そこでクラックホーン，C.は，価値と実在とは緊密に関係しあっており相互依存的であるが，少くとも分析レベルでは概念的に区別されるとして，人間の経験を三つの類型に分つのである.[2]即ち，

(1)存在するもの，又は存在すると信じられているもの．(existential)

(2)自分と他の人々が，ないしは自分又は他の人々が望むもの．(desire)

(3)自分と他の人々が，ないしは自分又は他の人々が望むべきもの．(the desirable)

の三つである．このうち(3)the desirable が，クラックホーンによれば「価値」にかかわる経験である．この図式をパーソンズ（Parsons, T.）らの行為理論の分析概念を適用することによって，さらに詳しく検討してみよう．

パーソンズらが行為分析のための基本概念として用いているものに，行為者の状況への「志向(orientation)」がある.[3]ここでいう「志向」とは，行為者が何を欲しているか（目的），彼が何を見るか（状況がどのように見えているか），彼が見ている客体から欲するものを如何にして得ようとしているか（行為の計画）の三つの見地から，行為者が状況についてもつところの概念である．この「志向」は分析上は「動機志向（motivational orientaion)」と「価値志向(value ortientation)」との二つに分つことが出来る.[4]

動機志向は，行為者の欲求性向（need-disposition が現在又は将来充足させられるか否かにかかわる側面である．動機志向はさらに，認知的様式（cognitive mode)，カセクシス的様式(cathectic mode)，評価的様式（evaluative mode）の三つに分析される．認知的様式は，行為主体が自分の欲求性向との関連から客体をながめ，行為の状況における客体の位置を設定し，客体の諸性質，諸機能，他の客体との区別等を決定する過程である．カセクシス的様式は，行為主体が客体に情緒的な意味を付与する過程である．それは，客体が行為者の欲求性向又は動因に対して充足的であるか否かによって，客体に肯定的又は否定的なカセクシスを注ぐ過程である．最後に，評価的様式は，主体がカセクシスを注いだ客体に対して行為を行う際に，諸行為間へのエネルギーを分配する過程である．認知的，カセクシス的過程で選択が必要なときにこの評価的様式が作用する．そしてこの評価作用の過程で何らかの基準が求められるときに価値志向が作用するのである．従って，厳密な意味での行為者の思推（意識・精神）作用がかかわるのは，動機志向の評価的様式においてであるといえよう．行為主体は，認知的，カセクシス的な過程では，その場限りの状況において客体を問題にしているのであるが，評価的な過程では行為者は時間的，社会的な展望の中で客体を秤量するのである．

* 宇部工業高等専門学校社会教室

価値志向は，行為主体が選択状況にあるときに一定の規範とか基準にすべてを委せ，これらを遵守するようにさせる志向である 行為主体が様々の手段や客体のいずれかを選択せねばならないとき，又どの欲求性向をどの程度まで充足させるかを決めねばならないとき，彼は自らの価値志向に従って選択の導きとなる一定の規範に決定を委ねんとする．価値志向も動機志向の三様式に並行して，三つの様式に分析される．それは，認知的様式(cognitive mode)，鑑賞的様式(appreciative mode)，そして道徳的様式(moral mode)の三つのである．認知的様式は，認知的判断の妥当性を決めるための基準に関する側面である．鑑賞的様式は，特定の客体にカセクシスを注ぐことが適切であるかどうか，又はこのカセクシスの注ぎ方に一貫性があるかどうかを判断するための基準に関する側面である．そして，道徳的様式とは，特定の行為の結果が行為者に如何なる影響を及ぼすかについての基準にかかわる様式である．それは，選択された行為の結果が行為者自身のパーソナリティ体系の統合にどう影響するか，さらには彼の参加する社会体系の統合にどう影響するかという見方を与えることによって，行為者の選択を導く側面である．従って，道徳的様式は，以上の全行為体系を評価しこれを規制する包括的，統合的な基準にかかわる側面であるといえよう．

ところで，行為が動機志向の認知的，カセクシス的様式の過程のみにかかわって評価的様式の発動がほとんどみられないような場合，それは行為(action)というよりも，むしろ行動(behavior)に近いものといえよう．評価的様式がかかわりをもたない行為は，自己一個の狭い枠に閉じ込められた一時的，恣意的な行為である．人間の主体的行為における判断は，動機志向の評価的様式にかかわることによって，反省的，意識的に考慮され，さらに価値志向によって，一定の基準に照会される．この際に，個々の行為主体内部の価値基準は，文化の価値基準とも対応しているのである．即ち，価値志向は行為者の欲求性向の一部としてパーソナリティ内部に位置を占めると同時に，一方，文化の要素として価値志向の型はパーソナリティからは独立して存在している．この文化に型として統合されている価値基準は，その成員によって内面化されて個人的な価値基準となると同時に，文化内の人々によって往々にして事実判断の基準として取違えられるのである．この個人内部の価値基準は，ランドバーグの「暗黙の前提」に対応させることが出来よう．クラックホーン，C.が経験の3類型とする(1) existential,(2)desire (3)the desirableはこのパーソンズの行為分析の概念で説明することが出来る．人間の行為がかかわるのはdesireとthe desirableの領域である．desireの領域では，動機志向の認知的様式とカセクシス的様式の作用のみがみられて，評価的様式はほとんど関与していないと考えられる．主体が客体を単に望んだり，欲したり，好んだりする限りで，それは個人的感性の印象や，気分的印象にもとづく経験である．従って，desireの領域は，主体の主観的，恣意的感情が強く作用する領域である．ところが，選択対象が2つ以上考慮され，どちらかを選ばねばならないようになると，主体はどちらを望むべきかを考える．ここで評価的様式が発動するのである．この領域がthe desirableの領域であるといってよかろう．ここでは，主体は客体を単に望み，欲し，好むだけでなくて，望ましいもの，欲すべきもの，好ましいものとしてながめるのである．

パーソンズの行為理論においては，「価値」は特に意識的行為にかかわるものとされているのであるが，後にみるようにクラックホーン，C.の価値論においても「価値」は単なる欲求，衝動，カセクシスといったものとは区別されている．クラックホーン，C.が「価値」とするものはthe desirableの領域に限定される．パーソンズやクラックホーン，C.は「価値」を人間の意識的，主体的行為にかかわらしめることによって，「価値」を経験的な行為の独立変数として捉えているのである．

パーソンズは哲学的問題と科学的問題は相互独立的であるとしながらも，人間の観念を行為決定のための重要な要因と規定して，これを経験レベルで扱わんとしている．[5]行為の方向を決定する人間主体の目的意識が，さらに視点を拡大したときに，決定論的な法則の支配下にあるか否かは別問題としても，少くとも我々が経験する範囲においては，人間の行為は因果連関的諸要因と区別される人間主体の意識的要因を含んでいるといい得る．人間がある行為をなすに際して，将来の結果や他人に及ぼす影響を考慮して行為の方向を決めたならば，「将来の予見」や「他人への顧慮」は行為の変数として作用したことになる．そして経験的事実たる行為の様式，手段，目的を選択するにあたって影響を及ぼす要因は，当然経験的事実として扱うことが出来る．クラックホーン，C.やパーソンズは，「価値」をこのような行為の主体的選択に際して影響を与える概念として定義するのである．[6][7]

行為の選択的状況において下される判断が価値判断であるとしたならば，価値判断の規定要因としては，価値

主体の側の要因，価値客体の側の要因，そして価値判断が下される場における状況的要因が考えられる．価値主体の側の要因とは，価値判断を下す主体が内面化している価値とか彼の欲求構造とかが考えられる．価値客体の側の要因とは，客体が備えている固有の属性であるといい換えてもよかろう．そして状況的要因は，主体客体の属性とは別のものであって，いうなれば「主体と客体の関係の属性」である．クラックホーン C.やパーソンズが定義する価値は，このうち，価値判断の主体の側にあって機能する要因と考えられる.[8]

〔註〕

1)Bouglé, C.; Leçons de sociologie sur l'evolution des valeurs,1922.平山高次訳「価値の進化」

2)Kluckhohn, C.; "Values and Value-Orientations in the Theory of Action: An Exploration in Definition and Classification", in Parsons,T.and Shils,E.A.(ed),Toward a General Theory of Action,p.394

3)Parsons,T.and Shils,E.A.; Toward a Geneval Theory of Action,p.58 永井道雄他訳「行為の総合理論をめざして」(前半Ⅰ,Ⅱ部の訳)

4)ibid.,pp.53〜60

5)Parsons,T.; "The Role of ideas in Social Action",in Essays in Sociological Theory, p.19

6)Kluckhohn,C.,op.cit.,p.395
Parsons,T.; "The Social System",p.12

7)主体的，意識的な行為と衝動的，無意識的な行為とは必ずしも明確に分けることは出来ないともいえる．例えば，我々が習慣的な行為を行うに際しては，ほとんど無意識的に判断を行っている．このような行為において下される価値判断は，過去に行われた価値判断か，他人の（ないしは社会集団の）行った既成の価値判断の繰返しである．従って，習慣的行為は意識的な価値判断の介入をほとんどみないという点で，主体的，意識的行為よりも衝動的，本能的行為（行動）に近いものといえよう．例えば，リントン(Linton,R.)のいう発生的反応(emergent response)と既成反応(established response)のうち後者のような反応が習慣的行為と考えられる．(Linton,R.; The Cultural Background of Personality,清水幾太郎他訳「文化人類学入門」)

8)Catton,W.R.は，価値付与行動（価値判断）の諸変数として次のようなものをあげている．
(1)価値主体が社会的，文化的に獲得した「価値」
(2)価値主体が社会的に獲得したところの価値客体の諸特質（属性）に関する知識，
(3)価値主体と「望みの対象（desiderata）」(価値客体)との間にあるn次元の価値空間における距離．
そして(3)のn次元の内容として，
(a)空間的距離，(b)社会的距離，(c)時間的な遠さ，(d)可能性，(e)一回性，(f)自由選択性，が考えられるとする．(Catton,W.R.(JR.),"A Theory of Value",American Sociological Review vol 24,pp.310〜317.)

(5)

前章において，価値主体，価値客体，価値空間，価値判断等の言葉を明確な前提なしに用いたのであるが，これらの言葉を今少し厳密に吟味しておかねばならない．同時に又，「価値」の概念自体について，特に社会学的な文脈においてそれが含んでいる本質的問題点を検討しておく必要がある．

価値主体というのは，価値付与ないしは価値判断を行う主体のことである．価値付与とは，主体が対象に価値を与えること，即ち対象の価値を認めることである．従ってそれは，対象が価値あるものと主体が判断することでもある．価値客体とは，価値主体によってその価値を判断された対象である．価値主体は個々の人間にのみ限られるわけではなく，社会集団ないしは全体社会も又価値判断の主体として考慮されねばならない.[1]価値客体は価値判断の対象となるものすべてを意味しており，それは有形，無形，又は実在，非実在を問わぬ思考の対象となり得る一切のものを含んでいる．このような価値主体と価値客体の両者によって「価値」が構成される．即ち，「価値」は主体と客体の両者にまたがる概念である．では，一体この「価値」自体をどう解釈すればよいのか．「価値」はどこに位置すると考えるべきなのか．アドラー，F.(Adler,F.)の行った価値概念の四つの分類に準拠しつつこの基本的な問題について考えて行きたい．

アドラー,F.は，従来の社会学論文において「価値」という言葉が充分に定義されることなしに用いられており，その用法は様々であって一定していないという．そこで彼はこのような種々の「価値」という概念の使用法を次のような四つの型に分つのである.[2]即ち，

(A)価値とは永遠の理想，独自の妥当性をもったものとして神の心に宿るところの絶対的なものである．

(B)価値とは物質的ないしは非物質的な客体の内に存在するものである．

(c)価値は，個人又は集合状態にある人間(集団,社会文化，国家，階級等々）の内に即ち価値主体の内に位置するものである．

(D)価値は行為と同一視される．

この四つである．

(A)型の価値は，いわゆる絶対的な価値であって，直接の霊感とか神による啓示によって知ることが出来るという．(A)型の価値定義を行っている社会学者として，アドラーはソローキン(Sorokin,D.A.)とファーフィ(Furfey,P.H.)をあげている．ファーフィは，価値を「よさ(goodness)に基礎をもったところの承認せられた望ましさのもつ性能」と定義しているが，ここでgoodnessとは絶対的なものであるというのである.[3]しかし，いずれにせよこのような絶対性は自然科学的方法による研究の受入れるところではないとして，アドラーは(A)型の価値定義を社会学の領域から斥けるのである．

(B)型の価値定義の例としてアドラーがあげているのはパーク(Park,R.E.),バージェス(Burgess,E.W.),リントン(Linton,R.),ベッカー(Becker,H.),フェアチャイルド(Fairchild,H.P.)等々である．パークとバージェスの定義は，「評価される（望まれる）資格のあるのは何でも一個の価値である」[1]であり，ベッカーは，価値とは「あらゆる欲求に対するあらゆる対象(any object of any need)」[5]と定義する．フェアチャイルドの定義は，「価値とは人間の欲求を充足するところの何らかの客体のもつ性能(capacity)」[6]であり，リントンの定義は「価値とは一連の状況に共通して存在し，個人の内面的反応をよび起し得るすべての要素」[7]である．従って,これら(B)型の定義によれば,価値は個人の外部にある何ものかであるとされ，それは個人内部の価値付与的活動によって姿をあらわすものである．そこで，アドラーは，「価値とは『価値評価されるところのもの(what is valued)』であるというのが(B)型の価値定義の意味するところだ」[8]と結論する．しかし，フェアチャイルドの定義では,価値は「欲求を充足するところの客体の性能」であって，客体そのものではない．従って，厳密にいえば,(B)型の価値定義の中でも,価値を客体の性能とするか，客体そのものとするかによって二つに分けられるといえよう．

(c)型としてまとめられる価値定義は，価値を人間の内部に設定するのであるが，それは(B)型の定義を裏返したものといえよう．(B)型の定義においては，価値は評価(esteem)の対象であったが，(c)型ではわれわれが対象に与える評価が価値とされるのである．従ってこの場合，価値は人間の内部に存在する心理的現象とか内的状態といったものとして捉えられる．アドラーのあげる(c)型の価値定義の例が，パーソンズとクラックホーン,C.の定義である．パーソンズによれば，価値とは「ある状況において，行為者が様々の志向を選定するにあたつて標準(criterion)又は基準(standard)としてはたらくところの分有されたシンボル体系の中の一要素」である.[9]又，後ほど検討するのだが，クラックホーン,C.によると，価値は「望ましいものに関する概念(conception)」[10]であって，「行為の遂行を統合する観念(ideas formulating action commitments)」[11]であるから，それは主体内部の要因として捉えられているというのである．

ところで，アドラーによれば，(A)型の価値はいうまでもなく，(B)型の価値も(c)型の価値も，現在の自然科学の方法をもってしてはいずれも受入れることが出来ないとされる．(B)型の価値は客体の内部に存在するのであるが価値が発生するのは客体の外部であるから，客体そのものの観察だけでは価値を捉えることは出来ない．(c)型の価値の場合は，価値は人間の内部に位置しているのであるから，観察者は感情移入的な理解(verstehen)によってそれを捉えねばならない．アドラーはこのような感情移入的な理解方法は自然科学的社会学の立場からみて容認出来ないとする．そこで彼は，行為が唯一の経験的に認め得る価値の側面であるというところから，行為と等視される価値のみが経験科学レベルで扱い得る価値であるとするのである．そこから(D)型の価値定義が出てくるのであるが，これがアドラーの定義する価値でもある．この定義の前提として，アドラーは，「人が為すことは何であれ，ある瞬間の所与の状況で彼が最もやりたいと思っていることである」[12]という仮定を設けている．そして，「行為＝価値」とするに際して，理解し得る行為の意味とは「経験的に確立され得る意味にかぎる」[13]のである．

アドラーのいうごとく，経験科学レベルでの価値を行為と同一視されるもののみに限るべきか否かということの是非はさておき，彼の行った価値定義の四つの分類からさしあたつて次のようなことが問題としてうかんでくる．まず，価値は人間の欲求，願望，意欲といったものと如何なる関係をもつのか，価値はこれらのものと相対

的であるのか，それとも人間の欲求等からは独立した絶対的なものであるのかということ．次に，価値は価値主体の側に位置するのか，価値客体の側に存在するのかという問題．そして価値客体の側に存在するとしたら，価値とは客体そのものであるのか，それとも客体のもつ性能なり属性なのであるかという問題．そして最後に，経験科学において価値を扱う場合には，その把握可能な範囲を一体どのあたりに限定すべきかという問題である．

第一番目の「価値の絶対性」ということについては，アドラーの主張するとおり，それが現に存在するか否かということは別にして，そのような絶対的価値は経験科学の領域から斥けられるべきであろう．なぜなら，直覚や神の啓示によってのみ知られるような絶対的価値は，それを把握するための経験的手掛りが得られない．従って我々が問題とする価値は，人間の欲求，願望等の現実的基盤を持ち得るものに限るべきであろう．[14]

第二に，価値を主体側に位置せしめるか，客体の側に置くかという問題であるが，これに明確な結論を与えることは困難である．アドラーの用いる例によるならば焼肉のよさは食べる人の味覚球の状態や，その人の宗教的教養などとは無関係に焼肉自体に備わつた絶対的なものといえる．その限りで，焼肉の価値は(A)型（絶対的）であるともいえるし，(B)型（客体に存在）であるとも考えられる．しかし，焼肉のよさは，焼肉を欲する人によって焼肉の中につくられる相対的価値であるともいえるのである．即ち，焼肉を欲する人が居なければ焼肉の価値は判断され得ない．ある人が焼肉を食べたいとするときには，焼肉自体にその人の飢えを充足する性能（属性）があり，同時に，その人にも焼肉を食べて満足する本性がある．そのようなところから，価値とは主体と客体の間に生じている関係力もしくは力的関係であるというような定義も考えられるのである．[15]

確かに，価値という概念は，価値主体及び価値客体のいずれを離れても成立しない概念であるといえる．この両者を前提することによってはじめて価値が存在する．価値は客体の客観的な属性にもとづいているのであるが，客体の客観的諸属性が即ち価値ではない．そのような客観的属性にもとづいて，価値主体が客体に認めたものが価値なのである．ガイガーの指摘するとおり，客体の客観的属性と価値とを同一視することは厳密にいって誤りである．ヒアシンスの「針形の葉」「総状の花」「青い色」等々は，ヒアシンスの「よいにおい」と同一次元で扱うことは出来ない．このことは，偶像や軍旗といったものに宿るシンボリックな価値に思い至ればさらに明瞭になろう．われわれが偶像や軍旗に認める価値は，鉱物の塊りとしての偶像や一片の布切れにすぎぬ軍旗の客観的属性とは直接の関係をもたない．[16]勲賞，称号，賞状等々は，特定の社会的文脈においてのみその価値を持ち得る．[17]従って，価値が主体の側に属するのか，客体の内に存在するのかということは一方的に言い切ることは出来ないであろう．価値が客体そのものとすることも以上のことから不適当であることが明かである．

最後の経験レベルでの価値の操作に関しては，次章でクラックホーン，C.の価値論を検討する際に言及しよう．

〔註〕

1) 牧口常三郎は，同一の対象に対しても，価値主体が個人であるか国家（社会）であるかによって，そこに下される価値判断の内容が異ることが多いとしている．例えば，利害という価値評語はもつぱら個人主体にかかわるのに対し，善悪という価値評語は，社会自身がその成員たる各個人の行為を評価する際に用いられる「社会自体が専有する価値判断である」という．（牧口常三郎；「価値論」，1930．牧口常三郎全集I．pp．223～350）

2) Adler, F ; "The Value Concept in Sociology", American Journal of Sociology, vol 15, 1950, pp.272～279

3) Furfey, P. H. ; The Scope and Method of Sociology, p.83.

4) Purk, R.E. and Burgess, E. M. ; Introduction to the Science of Sociology, p.488.

5) Becker, H. ; Through Values to Social Interpretation, p.10.

6) Fairchild, H.P. (ed) ; Dictionary of Sociology, p.331.

7) Linton, R ; The Cultural Background of Personality, 清水幾太郎他訳「文化人類学入門」p.139.

8) Adler, F., op. cit., p.273.

9) Parsons, T ; The Social System, p.12.

10) Kluckhohn, C., op cit., p.395.

11) ibid., p.396.

12) Adler, F., op.cit., p.276.

13) ibid., p.277.

14) この点に関して，貝田宗介がその価値定義において明確に述べている．（貝田宗介「価値意識の理論」p.18.）

その他に貝田の論文は，「価値意識の構造と機能」

(社会学評論50号)「価値意識論の構想」(思想N0.469,1963.)等がある

15)牧口常三郎;牧口常三郎全集I.p.23.

16)Durkheim,É.;Sociologie et philosophie,山田吉彦訳「社会学と哲学」pp.195〜6.

17)Tönnies,F.;„Soziale Werte", in Einführung in die Soziologie,SS.135〜186.

(6)

価値と実在という二分的カテゴリーによって示されるように,価値がかかわるのは純客観的自然とは一応区別される領域である.しかし,価値はまつたく事実の世界から遮断されて超経験の世界にのみ存在するものでもない.人間の行為が直接に観察可能な対象である以上,行為に影響を与える価値は何らかの経験的な取扱いを受け得る筈である.このような観点から,クラックホーン,C.は,価値を人間の行為と関連づけてそれを経験的に把握せんとするのである.以下,クラックホーン,C.の価値論の要点を順次おさえてゆき,経験領域における価値について考えてゆきたい.

クラックホーン,C.は価値を次のように定義する.即ち,「価値とは,利用可能な行為の様式,手段及び目的を選択(selection)するに際して影響を与えるところの,望ましいもの(the desirable)に関する,個人に特有な又は集団に特徴的な,顕示的もしくは黙示的な概念(conception)である」[1](傍点筆者).この定義にあらわれる価値主体は個人と社会集団である.個人,社会集団そして文化の三者が彼の価値論の核をなしているといい得る.ここで彼が強調することは,価値が認知的(conception),情緒的(desirable)及び意欲的(selection)な三要素を併せもっているということである.これは,パーソンズらの行為理論における動機志向の認知的(cognitive),カセクシス的(cathexis),評価的(evaluative)の夫々の側面に対応させることが出来る,即ち,価値の概念には,認知的,評価的な側面が含まれているために,価値は単なる感情,衝動,欲求,カセクシスといったものから区別される.それと同時に,価値は「望ましい」という情緒的側面をも有しており,論理的な否定によってのみ葬り去られるものではない.認知的,情緒的,意欲的という三側面を併せもつことは,価値が理性(reason)と感情(feeling),ないしは評価(appraisal)と願望(wish)といったものを統一する概念たることを意味するのである.

クラックホーン,C.によれば,価値は「主体によって抱かれた望ましいものについての概念」であるから,それは意識的なものであり,単なる好みと区別される.なぜなら,好み(preference)は主体による合理化や正当化を必要としない.これに対して望ましいもの(the desirable)とは,主体が欲するのが正しい(ないしは適当である)と感じたか,又は考えたところのものなのである.

さらに,価値は概念であり思念されるものであるから言語によって表明され得るものでなければならない.即ち,価値は抽象化と一般化によって経験から帰納されて主体に抱かれた概念なのだから,再びそれは言語で表現され得る筈である.黙示的な価値についてもクラックホーン.C.はそのverbalizabilityを主張する.黙示的な価値は,その価値を抱いている行為者自身にとっては不完全な言葉でしか表わせないのであるが,(その行為の)観察者によって言葉におきかえられ,そして行為者によって同意されたりされなかったりするという意味で,それはverbalizabilityであるというのである.又そのように,観察者による抽象化や一般化を受入れぬものは価値ではないとされるのである.本能的行動や単なる衝動は抽象化のレベル以下のもので,価値とは区別される.

次に,価値はdesirableなものに関する概念であるがdesirableというのは道徳的意味に限定されるものではない.それは,審美的,知的,評価的という多様な側面を有する.多様性をもつ価値と一元的な善とは区別されねばならないのである.善という言葉の中には,ある種の欲求を充足することを断念して,特定の客観的規範に従うことを要求する意味合いが強く含まれている.[2]これに対して価値は人間の様々の種類の欲求に対応して望ましいとされる概念なのである.パーソンズらの行為理論において,価値志向が三つの様式——cognitive,appreciative,and moral——に分析されていたのだが,これは価値の概念がもつところのdesirableという要素の多様性を示唆しているものと考えられるのである.ここで注意すべきことは,動機志向と価値志向との区別である.価値が動機志向の三側面を併せもつということは価値が知的,意識的な領域にかかわるということであり,価値が価値志向の三側面のいずれとも関連し得るということは,価値が人間の多様な欲求を反映しているということなのである.

ところで,価値が動機志向の評価的側面を備えているからには,それはdesirableにかかわるといっても,衝動やカセクシスとは同一のものではない.望まれたものは

すべてカセクシスを注がれたものであるといい得るが，必ずしも価値評価されたものであるとはいえない．カセクシスを注がれても望ましくないものは当然考えられるのである．では，望まれたものであっても望ましくないもの，即ち，望まれてはいるが逆評価を受けているもの(cathected but not desirable)とはどういうものか．クラックホーン，C.によれば，それは体系としてのパーソナリティもしくは体系としての社会又は文化と相入れないものである．価値は，個人内部でhierarchyをなす長期的目標の全系列や秩序を求めるパーソナリティ体系や社会・文化体系の要求等を考慮に入れて，カセクシス的満足の許容範囲を制限しているのである．[3]換言すれば，望ましいということは，パーソナリティ体系や社会・文化体系といった一つの全体的体系の統合にとって望ましいということなのである．

価値が行為の様式，手段そして目的の選択に影響を与えるという価値の能動的局面についてはどうか．この際に，価値がかかわりをもつ行為とは意識的，知的に考慮された行為であり，一時的，衝動的ないわゆる行動ではない．このような行為において，行為主体が客観的状況をすべて知りつくしていない以上，選択を迫られたときに彼の行為の方向を決めるのはその内部の価値である．だが，状況の示す純客観的連関は，どの行為者にとってもすべて同一であるというわけではない．第三者からみて可能な選択肢が存在すると思われる場合でも，特定の行為者にとっては一つのコースしが開かれていないことがあり得る．先に述べたように，特定社会集団における個人にとっては，その集団の価値は往々にして客観的自然と同一の一個の所与である．従って，選択的行為にどこまで価値が作用しているかということは，特定主体の行為に課せられている客観的な諸制限を充分考慮に入れなければ即断出来ない．特定の行為がなされる際の状況的諸要因，人間の生物学的特質，個人の属する社会・文化体系の一般的属性等は，しばしば行為主体の選択を許さないような絶対的なものである．このような客観的諸制限のみによって行為の方向がなおかつ決定されないような場合に作用するのが，行為主体の価値なのである．

かくして，クラックホーン，C．によれば，価値は，cognitive, affective, conativeの三要素，即ち動機志向のcognitive, cathexis, evaluativeの三側面を兼有しており，同時にそれは価値志向のcognitive, appreciative, moralのいずれの側面にも関与する概念であるとされるのである．

さて，この価値定義によれば，価値は「主体によって抱かれた概念」なのであるから，それはアドラーの分類の(c)型の価値である．価値が主体の抱く概念であるとすると，価値は直接に観察し得る対象ではなくて，観察された諸行為から推論された論理的な構成概念となる．価値は，制度，社会構造，文化といったものと同様に，言語を伴った，ないしは無言の人間の行動事象から抽象されたものである．従って，このような価値を捉えるには理解(Verstehen)的な方法が要求されるのである．クラックホーン，C.のこのような理解的方法を要求する価値定義に対して，アドラーは否定的な批判を加えている．

アドラーによれば，自然科学的社会学者が帰納による一般性に基づいた予見を目ざすのに対して，理解社会学(verstehende Soziologie ; interpretive sociology)の目ざすのは，直感的感情移入によって研究者の内につくられる一種の美的満足，即ち解釈であるという．前者が特定事象を理解(understand)するのは，それが立証された一般的命題のあてはまるような他の多くの事象と同一のものと認められた場合である．ところが理解社会学者は，特定事象において行為者がなしたことを自分もそうしただろうと感ずることによって理解する．従って後者の場合，行為の観察者は，行為に先行して何らかの点で行為の原因となっている価値を行為者に帰属させねばならない．行為を説明するのに用いられる価値が，説明されるべき行為の中に読み込まれているのは一種の循環論法ではないのかというのである．[4]確かにクラックホーン，C.は，「操作上，観察者は特定種類の類型的行動に注意する．観察者は，規程的(rubric)『価値』のもとに具体的行為を決定している諸課程の一面をつかまねば，この規則性を『説明』することが出来ない」[5]と述べている．アドラーは，このように行為を観察することによって理論構成を行う課程において，必ず観察者の恣意が介入するというのである．そこで彼は，経験科学としての社会学によって捉えられる価値は，行為と同一視されるものに限るべきだと主張する．そして，行為を観察してその行為の意味から価値を知るのであるが，この際の行為の意味とは「経験的に確立され得る意味」に限られるのである．行為の観察によって，その背後からそれ以上の意味を観察者が読みとるのは不当な行きすぎだというのである．

しかしながら，アドラーのいうこのような自然科学的方法によれば，我々の把握し得る価値は非常に制限されてしまうであろう．通常，特定の行為にはいくつもの価値が作用していると考えられるが，アドラーのいうように「経験的に確立され得る意味」しか理解出来ぬとした

ら，そのほとんどの価値は無視されねばならない．そして，個人や社会・文化体系の価値体系は，それがすぐれて理解的に構成された概念であるが故に，科学的に不当として斥けられなければならない．社会学がいかに科学性を要求されるといっても，人間行為や社会事象を把握するためには，やはり動機決定的な理解方法を排除しては実り多い結果は得られないといえよう．だが，アドラーの主張するとおり，観察者が行為を観察することによってそこから価値を構成的に推論する過程には絶えず観察者の恣意や臆断の介入するチャンスがあるのである．それは，観察→仮説→検証（観察，実験，調査等々）→仮説の手続きを繰返すことによって匡正してゆかれねばならないだろう．

では，クラックホーン，C.自身は，彼の定義する価値を如何にして操作的に扱わんとするのであろうか．彼は価値研究に際しての操作上の指標（operational indices）として次のような諸領域をあげる．[6]

第一は，是認ー否認が言葉か行為によって明白に示される領域である．価値はverbalizability，discussabilityという性質をもっているのだから，人々の言語表明は価値を知る上での指標となる．具体的には，人々が日常口にする'ought to''should'を含んだ言明，暗黙の是認ー否認を示すゴシップ，そして特定集団の法律，神話，宗教教義等々である．第二の領域は，行為の目的，手段そして様式へ向って人々が示すところの努力の領域である．例えば，アメリカ人は一般に職業組織の中で努力し成功せんとするが，他の特定の文化においては，過去の伝統へ志向したり，自己完成に努めたりするのがもつぱらである．第三は，選択状況の領域である．即ち，選択に際して示される一貫した方向性（directionarity）が，是認ー否認の連続上にあるものとして示されるならば，その選択的行為は特定の価値を志向しているものと考えられる．クラックホーン，C.は，以上のような諸領域を価値の指標としてあげているが，このいずれも価値そのものではないとされるのである．つまり，価値は物理学における力という概念と同じようなもので，価値そのものは見ることは出来ないが，価値のmanifestationは知ることが出来るというのである．

価値の検証の具体的な方法としては，観察による特定の規則性や傾向の発見，選択状況の綿密な分析等がある．その他に人為的な方法として，世論調査，投射法，インタヴュー法，偽装された選択テスト等が考えられる．選択状況の分析も，仮定的な選択肢を設定したり，投射法や質問紙を使用したり，簡単な実験を行うことによって精密化することが出来るのである．[7]価値研究のためには，このように自然状態の観察によるもの，人為的な方法を用いるもの，この両者を組合せるものが考えられる．このうち，自然状態における観察は，個人や集団が平静な不断の状態にあるときと，戦争，災害等の異常な極限状況に置かれている場合とでは，夫々研究のための異った効果をもつ．例えば，危機状況においては，顕示的な言明価値（asserted value）と黙示的に行為に作用している価値（operating value）との間の食違いが浮ぼりにされるかもしれない．価値の言語的な表明と黙示的な状態での顕現とは，いずれが行為主体の真の価値であるか一方的に決めることは出来ず，注意深い観察が要求されるであろう．又，コーネル大学価値研究グループの指摘するように，価値は研究の過程そのものによっても変化を受けるということが考慮されねばならない．

いずれにせよ，価値が直接に手にとって観察することが出来ないものであり，研究者によって推論的に捉えられるものである以上，そこには現実との食違いが必ず出てくるものと考えられる．従って，クラックホーン，C.の価値定義を受入れた場合，構成されたモデル概念たる価値と現実の価値との間隙は，多様な検証の手段を繰返し用いることによって次第に埋められてゆかねばならないのである．

〔註〕

1) Klucokhon, C., op. cit., p. 395
2) 清水幾太郎；「現代における価値の問題」思想No. 425 1959. 11. p. 5
3) Kluckhohn, C., op. cit., p. 399.
4) Adler, F., op. cit. pp. 275～276
5) Kluckhohn, C., op. cit., p. 396
6) bid., pp. 403～405
7) ibid., pp. 405～410

（むすび）

人間は思惟して行為することによって外的環境に能動的に働きかけてゆく．物質が運動し，動物が行動するのは自然法則の完全な支配下にあるのだが，人間の行為はこのような自然法則に一方的に従うものではない．人間の行為は，自然法則によって部分的に規定されており，その残りの部分は彼の主体的な思惟の作用によって決定される．人間の主体的意識は，彼の行為を規定する主要な変数の一つであると考えられる．つまり，人間の行為を規定している要因は，因果連関的な自然的要因以外に

意識的，主体的な要因が考えられるのである．このような観点から，パーソンズやクラックホーン，C.は，人間主体の思惟作用の産物たる価値を，社会的行為の構造の中に位置づけたといえるのである．

しかし，行為理論における価値研究には自ずから限界があるといわねばならない．なぜなら，そこでは価値は一個の所与として扱われており，価値の起源，価値の変容といった問題は一応棚上げにされているからである．クラックホーン，C.自身，その価値論の結びの箇所で次のように述べている．

即ち，「我々は多くの問題を不充分に扱ってきたし，他のいくつかの問題にはまったく言及さえしなかったことは明白な事実である．価値の源泉や，価値に対するsanctionの起源（についての研究）は歴史的にも機能的にも興味ある部分である．如何なる種類の価値体系が，様々のレベルの技術的，社会的発展と相関関係を有しているのかという問題，さらには価値の両立性や非両立性といった問題――これらの問題には，我々はアプローチすることさえしなかった．価値がどのように学習され，受容され，そして普及されるのかということを知るためには，長いmonographicな研究が必要である」と.[1)]

〔註〕

1) Kluckhohn, C., op. cit., p. 433

（附記）

※本稿は，昭和41年度大阪大学社会学修士学位論文を母体として，それに若干の加筆訂正を行って新しく書き直したものである．その際に39年度大阪大学文学部学部卒業論文をも参考にした．

※パーソンズらの行為理論，クラックホーン，C.の価値論が発表され，既に15年以上経過している．その間に内外の優れた先達によってこれに対する批判，検討が行われ，さらに少なからぬ数の新理論が発表されている．本論文は，これらの諸理論に立交って新しい理論を主張せんとするものではなく，価値の概念について自分なりに根本からの考察を試みた，いわば「確認」のための覚え書とでもいわるべきものである．

（昭和42年9月10日　受理）